

# 笑 い 声

伴 耕一朗

「ガハハハー」と、大声で笑う福田さんの声が今でも耳から離れない。豪快な笑いだった。愉快的な笑いだった。大きい笑い声だった。

福田さんと始めて会ったのは、私が大学3年の頃、吾妻町の弘法原遺跡でした。卒業とともに私も文化課に入り（昭和58年）同じ釜の飯を食した、優しい大先輩でした。年の差も3才位しかなかったもので、以来ずっと兄貴の様な存在でした。

当事、文化課立山分室は、2階と3階に分かれてありました。若い衆の中でも、福田さんと私は3階でした。（後に小野ちゃんも3階に）そのような事もあって、事細かに色々と福田さんに尋ねたり教わったりしました。中でも、石器の観察、実測、トレース、撮影の仕方、考え方を丁寧に教えてもらったことは今でも鮮明に記憶しています。

そんな時の福田さんの顔は、真剣そのものと言うより集中した怖いくらいの形相でした。

豪快さと繊細さを様々なところで、いきなり投げかけてくる、それに戸惑う私たちを見ておどけてみせる福田さん。（皆さんも多々経験あることでしょう）

酒も良く飲みに行きました。権兵衛・とんぼ・ことぶき・十徳屋・おから亭・ひぐち等色々、大勢で、4、5人で、二人で。お互い20代の頃は、バブル真っ盛り、長崎の街も様々な店やビルが流行り、賑やかな時代でした。その中でも福田さんのケントス事件（あえて事件といますが、誰かが触れていることでしょう※）は1番に語り継がれる伝説的記憶でしょう。

楽しい酒でした。歌もよく歌いました。そんな時、いつも「ガハハハー」と大きな笑い声が響いていました。酒を飲んでいると、その耳慣れた笑い声が、時々、記憶の奥のほうから聞こえてくるのは私だけでしょうか。

※ケントス事件：当時長崎市内にあったディスコに行った際、アキレス腱断絶のため松葉杖姿の福田氏の入場をしる従業員に対して「身障者を馬鹿にするのか」と一喝して入場した事件。入場後松葉杖姿のままニコニコしながら踊っていた。（事務局注）